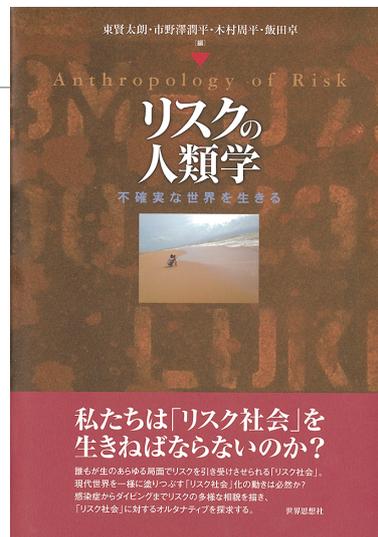


リスクの人類学

—不確実な世界を生きる

東賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田卓編
世界思想社／2014年／本体 4000円＋税



私たちの生活は、もちろんつねに安定したものではない。危険や脅威は突然訪れ、不幸や不運が生じる可能性は消去できず、不確実な未来への漠とした不安や怯えを抱えながら、日々の営みを続けている。そのような状況を「リスク」という言葉で表現するのであれば、人間の思考や行動は根本的に「リスクを認識し、(可能な限り)対処する」ことの繰り返しであるといえるかもしれない。

しかし、現代社会が「リスク社会」であるというとき、そこには過去から継続する人間活動のエッセンスとはやや異なった含意がある。それは、現代が過去と比べ、生のあらゆる局面においてリスクが多く大きく、またそのリスクの質も異なったものであるという認識を含み込んでいる。現代の「リスク社会」を生きる私たちは皆、そのように増殖した新たなリスクを引き受け対処することを余儀なくされているのであろうか。

U.ベックによって一般に広まった、「リスク社会」という現代社会への時代診断を一度引き受けるならば、もちろん新たなリスクに対処する方策こそがまずは求められるだろう。そしてそのような試みは、リスクにかかわる諸学問領域からすでに数多くなされている。しかし、本書『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』では、そうした「リスク社会」への処方的アプローチとはやや異なった問題意識を掲げている。それは、「リスク社会」を所与かつ必然のものとするのではなく、むしろその時代診断自体を吟味しようとする。

本書は、国立民族学博物館共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」(2008年10月～2012年2月、代表者：東賢太郎)の成果出版物である。3年半、計14回にわたって開催された共同研究会では、メンバーや招聘講師から多様な地域、文脈における「リスク社会」を生きる人々の営みについて報告がなされた。

研究会での報告や議論をもとに、個別の地域性や文脈から「リスク社会」という大きな物語を微視的に読み直してみたとき、①リスクはどのような仕組みで私たちの生活世界に浸透しているのか、②また個人はそのように浸透するリスクをどのように引き受けている／いないのか、③そもそも「リスク社会」という時代診断とは異なるオルタナティブの可能性はないのだろうか、という3つの問いが浮かび上がってきた。その問いを基軸に、本書は最終的に全11章(＋コラム3編)からなる3部構成にまとめ上げられた。

第I部「技術・制度としてのリスク」では、様々な事象が技術や制度を通じて、個々の主体を代行し、さらには主体間

のコンセンサス形成を促し、リスクが「事実」として私たちに現象する仕組みをあきらかにする。インドにおける多産問題(第1章)、バングラデシュにおける地下水砒素汚染(第2章)、日本における地震災害に対する予知・予防(第3章)という3つの具体的な状況下において、「リスク」と名指される現象が、それぞれの現場でどのように現れ、またどのようにしていまあるような形に至ったのか、描き出すことが試みられる。

第II部「リスク・コンシャスな主体」では、目の前に現れたリスクを人々がいかにして受け入れる(もしくは受け入れない)のかを、叙述する。観光ダイビングにかかわる業者と顧客(第4章)、航空機のパイロットや整備士(第5章)、原子力発電所建設に対峙する住民(第6章)、HIV感染リスクに向かい合うゲイ男性たち(第7章)のそれぞれの事例から、制度・技術が見出した／作り上げたリスクが人々の生活世界に侵入し、人々がリスク・コンシャスな主体として立ち上がる、その動態とメカニズムを、ミクロな視点から描写する。

第III部『「リスク社会」へのオルタナティブ』では、陰鬱な「リスク社会」への道筋から逃れる可能性が模索される。フィリピン地方都市の無職状況にある若者たち(第8章)、マダガスカル島の漁撈社会の漁民たち(第9章)、エチオピアの葬儀講活動(第10章)、アメリカ社会のファット・アクセプタンス運動(第11章)の各事例から、現代社会の「リスク社会」化がもたらす(多くはネガティブな)インパクトと、それらに対抗する／オルタナティブとなりうる思考や実践の可能性が示される。

本書は、これまでの生態人類学、経済人類学、災因論、医療人類学、リスクの文化理論など先行の人類学研究を引き継ぎながら、多様な地域や文脈における微視的な状況への民族誌的アプローチによって、「リスク社会」についての記述と説明を試みたものである。現在進行形の現代的な事象ゆえに、その試みは多分に議論の出発点となるものであるが、本書への評価や批判が後続の議論へとつながっていくことを、編者の一人として強く願う。

文 東賢太郎

名古屋大学大学院文学研究科准教授。専門は文化人類学。フィリピン社会における呪術、宗教、医療、労働、観光など、文化的諸事象に関する調査研究を継続的に行っている。著書に『リアリティと他者性の人類学—現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから』(三元社2011年)、著作に「呪いには虫の糞がよく効く」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』(人文書院2012年)など。